

走れメロス

山賊たちは、ものも言わず一斉に棍棒を振り上げた。メロスはひよいと、体を折り曲げ、飛鳥のごとく身近の一人に襲いかかり、その棍棒を奪い取って、

「気の毒だが正義のためだ！」と猛然一撃、たちまち、三人を殴り倒し、残る者のひるむ隙に、さっさと走って峠を下った。一気に峠を駆け降りたが、さすがに疲労し、おりから午後の灼熱の太陽がまともに、かっと照ってきて、メロスは幾度となくめまいを感じ、これではならぬ、と気を取り直しては、よろよろ二、三歩歩いて、ついに、がくりと膝を折った。立ち上がることができぬのだ。天を仰いで、悔し泣きに泣きだした。ああ、あ、濁流を泳ぎきり、山賊を三人も撃ち倒し韋駄天、ここまで突破してきたメロスよ。真の勇者、メロスよ。今、ここで、疲れきって動けなくなるとは情けない。愛する友は、①おまえを信じたばかりに、やがて殺されなければならぬ。おまえは、希代の不信の人間、まさしく王の思うつぼだぞ、と自分を叱ってみるのだが、全身萎えて、もはやいも虫ほどにも前進かなわぬ。路傍の草原にごろりと寝転がった。身体疲労すれば、精神もともにやられる。もう、どうでもいいという、勇者に不似合いなふてくされた根性が、心の隅に巣くった。私は、これほど努力したのだ。約束を破る心は、みじんもなかった。神も照覧、私は精いっぱい努めてきたのだ。動けなくなるまで走ってきたのだ。私は

不信の徒ではない。ああ、できることなら私の胸を断ち割って、真紅の心臓をお目にかけてたい。愛と信実の血液だけで動いているこの心臓を見せてやりたい。けれども私は、この大事なときに、精も根も尽きたのだ。私は、よくよく不幸な男だ。私は、きつと笑われる。

私の一家も笑われる。私は友を欺いた。途中で倒れるのは、初めから何もしないのと同じことだ。ああ、もう、どうでもいい。これが、私の定まった運命なのかもしれない。セリヌンティウスよ、許してくれ。きみは、いつでも私を信じた。私もきみを、欺かなかった。

私たちは、本当によい友と友であったのだ。一度だって、暗い疑惑の雲を、お互い胸に宿したことはなかった。今だって、きみは私を無心に待っているだろう。ああ、待っているだろう。ありがとう、セリヌンティウス。よくも私を信じてくれた。それを思えば、たまらない。友と友の間の信実は、この世でいちばん誇るべき宝なのだ。

からな。セリヌンティウス、私は走ったのだ。きみを欺くつもりは、みじんもなかった。信じてくれ！ 私は急ぎに急いでここまで来たのだ。濁流を突破した。山賊の囲みからも、するりと抜けて一気に峠を駆け降りてきたのだ。私だから、できたのだよ。ああ、このう

え、私に望みたもうな。放っておいてくれ。どうしても、いいのだ。私は負けたのだ。だらしががない。笑ってくれ。王は私に、ちよっと遅れてこい、と耳打ちした。遅れたら、身代わりを殺して、私を助けてくれると約束した。私は王の卑劣を憎んだ。けれども、今にな

ってみると、私は②王の言うままになっている。私は、遅れていくだろう。王は、独り合点して私を笑い、そうしてこともなく私を放免するだろう。そうになったら、私は、③死ぬよりつらい。私は、永

遠に裏切り者だ。地上で最も、不名誉の人種だ。セリヌンティウスよ、私も死ぬぞ。きみと一緒に死なせてくれ。きみだけは私を信じしてくれるにちがいない。いや、それも私の、独りよがりか？ ああ、もういっそ、悪徳者として生き延びてやろうか。村には私の家がある。羊もいる。妹夫婦は、まさか私を村から追い出すようなことはないだろう。正義だの、信実だの、愛だの、考えてみれば、くだらない。人を殺して自分が生きる。それが人間世界の定法ではなかったか。ああ、なにかも、ばかばかしい。私は、醜い裏切り者だ。どうとも、勝手にするがよい。やんぬるかな。——四肢を投げ出して、うとうと、まどろんでしまった。

ふと耳に、潺々、水の流れる音が聞こえた。そっと頭をもたげ、息をのんで耳を澄ました。すぐ足もとで、水が流れているらしい。よろよろ起き上がって、見ると、岩の裂けめから滾々と、なにか小さくささやきながら清水が湧き出ているのである。その泉に吸い込まれるようにメロスは身をかがめた。水を両手ですくって、ひと口飲んだ。ほうと長いため息が出て、夢から覚めたような気がした。歩ける。行こう。肉体の疲労回復とともに、僅かながら希望が生まれた。④義務遂行の希望である。わが身を殺して、名誉を守る希望である。斜陽は赤い光を、木々の葉に投げ、葉も枝も燃えるばかりに輝いている。日没までには、まだ間がある。私を、待っている人があるのだ。少しも疑わず、静かに期待してくれている人があるのだ。私は、信じられている。私の命などは、問題ではない。死んでおわび、などと気のいいことは言っておられぬ。私は、信頼に報いなければならぬ。今はただその一事だ。走れ！ メロス。

私は信頼されている。私は信頼されている。先刻の、あの悪魔のささやきは、あれは夢だ。悪い夢だ。忘れてしまえ。五臓が疲れているときは、ふいとあんな悪い夢を見るものだ。メロス、おまえの恥ではない。やはり、おまえは真の勇者だ。再び立って走れるようになったではないか。ありがたい！ 私は、正義の士として死ぬことができるぞ。ああ、日が沈む。ずんずん沈む。待ってくれ、セウスよ。私は生まれたときから正直な男であった。正直な男のままにして死なせてください。

道行く人を押ししのけ、跳ね飛ばし、メロスは黒い風のように走った。野原で酒宴の、その宴席のまっただ中を駆け抜け、酒宴の人たちを仰天させ、犬を蹴飛ばし、小川を飛び越え、少しづつ沈んでゆく太陽の、十倍も速く走った。一団の旅人とさっとすれ違った瞬間、不吉な会話を小耳にはさんだ。「今頃は、⑤あの男も、はりつけにかかっているよ。」ああ、その男、その男のために私は、今こんなに走っているのだ。その男を死なせてはならない。急げ、メロス。遅れてはならぬ。愛と誠の力を、今こそ知らせてやるがよい。風態なんかは、どうでもいい。メロスは、今は、ほとんど全裸体であった。呼吸もできず、二度、三度、口から血が噴き出た。見える。はるか向こうに小さく、シラクスの町の塔楼が見える。塔楼は、夕日を受けてきらきら光っている。

「ああ、メロス様。」うめくような声が、風とともに聞こえた。

「誰だ。」メロスは走りながら尋ねた。

「フィロストラトスでございます。あなたのお友達セリヌンティウス様の弟子でございます。」その若い石工も、メロスの後について

走りながら叫んだ。「もう、だめでございます。無駄でございます。走るの、やめてください。もう、あのかたをお助けになることはできません。」

「いや、まだ日は沈まぬ。」

「ちょうど今、あのかたが死刑になるところです。ああ、あなたは遅かった。お恨み申します。ほんの少し、もうちょっとでも、早かったなら！」

「いや、まだ日は沈まぬ。」メロスは胸の張りさける思いで、赤く大きい夕日ばかりを見つめていた。走るよりほかはない。

「やめてください。走るの、やめてください。今はご自分のお命が大事です。あのかたは、あなたを信じておりました。刑場に引き出されても、平気でいました。王様が、さんざんあのかたをからかっても、メロスは来ます、とだけ答え、強い信念をもち続けている様子でございました。」

「それだから、走るのだ。信じられているから走るのだ。⑥間に合う、間に合わぬは問題でないのだ。人の命も問題でないのだ。私は、なんだか、⑦もっと恐ろしく大きいもののために走っているのだ。ついてこい！ フィロストラトス。」

「ああ、あなたは気が狂ったか。それでは、うんと走るがいい。ひよっとしたら、間に合わぬものでもない。走るがいい。」

言うにや及ぶ。まだ日は沈まぬ。最後の死力を尽くして、メロスは走った。メロスの頭は、空っぽだ。なにひとつ考えていない。ただ、わけのわからぬ大きな力に引きずられて走った。日は、ゆらゆら地平線に没し、まさに最後の一片の残光も、消えようとしたとき、

メロスは疾風のごとく刑場に突入した。間に合った。

「待て。その人を殺してはならぬ。メロスが帰ってきた。約束のとおり、今、帰ってきた。」と大声で刑場の群衆に向かって叫んだつもりであったが、喉がつぶれてしわがれた声がかすかに出たばかり、群衆は、一人として彼の到着に気がつかない。すでにはりつけの柱が高々と立てられ、縄を打たれたセリヌンティウスは、徐々につり上げられてゆく。メロスはそれを目撃して最後の勇、先刻、濁流を泳いだように群衆をかき分け、かき分け、

「私だ、刑吏！ 殺されるのは、私だ。メロスだ。彼を人質にした私は、ここにいる！」と、かすれた声で精いっぱい叫びながら、ついにはりつけ台に上り、つり上げられてゆく友の両足に、かじりついた。群衆は、どよめいた。あっぱれ。⑧許せ、と口々にわめいた。セリヌンティウスの縄は、ほどかれたのである。

「セリヌンティウス。」メロスは目に涙を浮かべて言った。「私を殴れ。力いっぱい頬を殴れ。私は、途中で一度、⑨悪い夢を見た。きみがもし私を殴ってくれなかったら、私はきみと抱擁する資格さえないのだ。殴れ。」

セリヌンティウスは、全てを察した様子でうなずき、刑場いっばいに鳴り響くほど音高くメロスの右頬を殴った。殴ってから優しくほほえみ、

「メロス、私を殴れ。同じくらい音高く私の頬を殴れ。私はこの三日の間、たった一度だけ、⑩ちらときみを疑った。生まれて、初めてきみを疑った。きみが私を殴ってくれなければ、私はきみと抱擁できない。」

メロスは腕にうなりをつけてセリヌンティウスの頬を殴った。

「ありがとう、友よ。」二人同時に言い、ひしと抱き合い、それからうれし泣きにおいおい声を放って泣いた。

群衆の中からも、歎歎の聲が聞こえた。暴君ディオニススは、群衆の背後から二人のさまを、⑩見つめていたが、やがて静かに二人に近づき、顔を赤らめて、こう言った。

「おまえらの望みはかなったぞ。おまえらは、わしの心に勝ったのだ。信実とは、決して空虚な妄想ではなかった。どうか、わしをも仲間に入れてくれまいか。どうか、わしの願いを聞き入れて、⑪おまえらの仲間の一人にしてほしい。」

どつと群衆の間に、歓声が起こった。

「万歳、万歳万歳。」

一人の少女が、緋のマントをメロスにささげた。メロスは、まごついた。よき友は、気をきかせて教えてやった。

「メロス、きみは、⑬真っ裸じゃないか。早くそのマントを着るがいい。このかわいい娘さんは、メロスの裸体を、皆に見られるのが、たまらなく悔しいのだ。」

勇者は、ひどく赤面した。

問一 傍線①「おまえを信じたばかりに」の「ばかりに」と同じ意味で

使われているものを次から選びなさい。

ア、頭をたたみにつけんばかりにおじぎをした。

イ、やせたいばかりに食事を制限するなんて、とんでもない。

ウ、料理を出すばかりにしてある。

エ、起きたばかりにごはんを食べては消化が悪い。

問二 傍線②「王の言うまま」とはどのようなことか、簡潔に答えなさい。

問三 傍線③「死ぬよりつらい」こととして適切なものを次から選びなさい。

ア、王にうそつきで卑劣な人間だと思われること

イ、これからずっと走り続けなくてはならないこと

ウ、自分のせいでセリヌンティウスが殺されること

エ、セリヌンティウスに裏切られること

問四 傍線④「義務遂行」について答えなさい。

a、具体的には何をすることか、簡潔に答えなさい。

b、メロスが「義務」を遂行しなければならない理由を答えなさい。

問五 傍線⑤「あの男」とはだれのことか。文章中から抜き出さなさい。

問六 傍線⑥「間に合う、間に合わぬは問題でない」とあるが、何が問題なのか、適切なものを次から選びなさい。

ア、セリヌンティウスを無事に助け出すこと。

イ、目が沈んでしまう前に刑場にたどりつくこと。

ウ、セリヌンティウスの信頼にこたえること。

エ、フィロストラトスに友との絆を見せること。

問七 傍線⑦「もっと恐ろしく大きいもの」とは何か、文章中から漢字

二字で抜き出して答えなさい。

問八 傍線⑧「許せ」について、これはだれの言葉か、文章中から抜き出して答えなさい。

問九 傍線⑨「許せ」について、これはだれの言葉か、文章中から抜き出して答えなさい。

問十 傍線⑩「見つめていたが、やがて静かに二人に近づき、顔を赤らめて、こう言った。」について、文中から適切なものを次から選びなさい。

問十一 傍線⑪「おまえらの望みはかなったぞ。」について、文中から適切なものを次から選びなさい。

問十二 傍線⑬「真っ裸じゃないか。」について、文中から適切なものを次から選びなさい。

問九 傍線⑨「悪い夢」の内容として適切なものを次から選びなさい。

ア、メロスが王に殺されるかもしれないとおびえたこと。

イ、セリヌンティウスが王に殺されると思ったこと。

ウ、メロスがセリヌンティウスを裏切ろうとしたこと。

エ、セリヌンティウスが王をだまして殺そうと思ったこと。

問十 傍線⑩「『ちらときみを疑った』」について、誰が誰をどのよう
に疑ったのか、わかるように答えなさい。

問十一 ⑪に当てはまる言葉を次から選びなさい。

ア、ちらちらと イ、まじまじと

ウ、いらいらと エ、じろじろと

問十二 傍線⑫「おまえらの仲間の一人にしてほしい。」とありますが、

この時の王の気持として適切なものを次から選びなさい。

ア、仲間になったふりをして二人をだまし、殺してしまおうとた
くらむ気持ち。

イ、友情で結ばれた二人に感動し、心の底から仲間にしてほしい
と願う気持ち。

ウ、自分が考えたとおりに二人が感動的に再会したので、満ち足
りた気持ち。

エ、自分の国の若者と仲間になるのは、政治を行う上で必要だと
思う気持ち。

問十三 メロスとセリヌンティウスの様子を見ていた王が悟ったこ

とは、どのようなことだったか。それがわかる一文を王の言葉
から抜き出して答えなさい。

問十四 傍線⑬「真っ裸」について、その理由を簡潔に答えなさい。

問十五 メロス、セリヌンティウス、王の人物像として最も適切なも
のを、それぞれ選びなさい。

ア、人を信じることは何よりも大切だと思っ
てはいるが、疑わずには
いられない人物。

イ、友達のことを無条件に信
じることができ、強い信念
を持つ人物。

ウ、心の中では人を信
じたいと思いつつも、信
じることができなかつた
孤独な人物。

エ、人を疑うことをきらい、
自分の信念のために困難
に向かう強さを持つ人物。

中2国語定期テスト対策問題（走れメロス）

問十五	問十四	問十三	問十二	問十	問八	問五	問四	問三	問一
<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>
							b	a	
					問九	問六			問二
					<input type="text"/>	<input type="text"/>			<input type="text"/>
				問十一		問七			
				<input type="text"/>		<input type="text"/>			

中2国語定期テスト対策問題〔走れメロス〕

問一

イ

問二

(少しだけ)遅れて行くこと

問三

ア

問四

a

日没までに帰り着くこと

b

セリヌンティウスを救うため

問五

セリヌンティウス

問六

ウ

問七

信
.....
頼

問八

群衆

問九

ウ

問十

セリヌンティウスが、メロスは裏切るのではないかと疑った

問十一

イ

問十二

イ

問十三

信実とは、決して空虚な妄想ではなかった。

問十四

セリヌンティウスのもとに急いだために気づかなかったから

問十五

メロス

イ

王

ウ